

## 編集後記

第 25 巻 1 号をお届けします。25 巻の数字が表していますように、本号は本研究懇談会発足以来、25 年目の節目を迎える会誌であります。巻頭言には、この記念号を祝して、委員長の水野忠雄先生より本研究懇談会を支えていただいた諸先輩方へのお礼とこれからのさらなる発展を祈念した力強いメッセージをいただきました。この記念の年を祝すかのように、本年 9 月末から 10 月にかけて、International Conference on Flow Injection Analysis 2008 が水野忠雄本研究懇談会委員長を実行委員長として名古屋で開催されますことは、誠に同慶の至りであります。巻頭言には、大阪府立大学の八尾俊男先生に FIA の Science and Technology に対するさらなる果たすべき役割をご指摘いただきました。

都立大学名誉教授の保母敏行先生には、都立大学ご退官後よりパーソナルレビューをお願いしておりましたが、回顧に浸っている場合ではないとのことで、FIA 法のグローバルな視点から標準化や規格化を戦略的に行っていく必要がある趣旨のご指摘をいただきました。この意味でも本研究懇談会の果たすべき役割は大きいのではないのでしょうか。

今回の総説欄には、巻頭言にも御寄稿いただきましたポーランド Warsaw 大学の Trojanowicz 先生に "Nanostructures in Flow Analysis" と題する総説をご寄稿いただきました。内容は、前号の巻頭言で述べられていた流れ分析法の miniaturization 化であり、microfluidics や nanofluidics の流れとナノ構造を持つ nanoparticle, carbon nanotube などを利用した検出法について、多くの実例を文献か

ら引用して総説を書いていただきました。

研究論文の欄には、今回の記念号にふさわしく、16 報のオリジナル論文が投稿されました。そのうちの 9 報は、昨年 12 月にタイのチェンマイで開催されました International Symposium on Flow-Based Analysis VII のプロシーディングとして企画しました投稿論文です。これから大いに活躍が期待される若手の研究者や学生さんもたくさんご投稿いただきました。これらの方々には、今後の FIA 及び流れ分析法をますます発展していただけるものと期待したいと思います。

トピクス欄には徳島大学の竹内政樹先生に「コンピュータ制御による大気中ガス成分の On-site 無人測定」と題した、自動化された流れ分析法によるガスのモニタリングについての話題を紹介していただきました。

報告欄では、昨年 12 月にタイのチェンマイで行われました International Symposium on Flow-Based Analysis VII の様子を、徳島大学の田中秀治先生に紹介いただきました。

国内の学会情報は、徳島大学の田中秀治先生に、また、FIA Bibliography は、岡山大学の高柳俊夫先生に引き続きお願いしております。大いにご利用いただければ大変うれしく思います。

先に述べましたように、本年は International Conference on Flow Injection Analysis 2008 が名古屋で開催されます。1991 年に熊本で開催されました Flow Analysis V につぐ、日本での開催になります。本会員の皆様方には是非ともご参加いただき、情報交換の場になれば大変うれしく存じます。

JFIA 編集委員長  
今任 稔彦